

## 《論文》

## ロシアの装飾的な冠物「ココーシニク」

## その歴史と特徴

岩本眞樹

## 1. はじめに

「ココーシニク **КОКОШНИК**」－この不思議な響きを持つことばは、ロシアの伝統的な女性の冠物の名称である。古代ルーシから続く民族衣装においてもっとも美しく独創的な女性の頭飾りのひとつである。現在では民族舞踊アンサンブルなどの舞台衣装として私たちの目に触れることが多いであろう。ロシアの民族衣装のシンボルと言ってもよい。

「ココーシニク」とはどのような意味なのであろうか。語源辞典によると、この名称は、古代スラブ語の **КОКОШ** ココシ、つまり《雌鶏 **курица**》や《雄鶏 **петух**》を表すことばが元となっており、ココーシニクは、鳥の頭にある「とさか」に似ていることから名づけられたとある。(Фасмер [1967]: 284) その名の通り、ココーシニクの形は、「頭の周りを囲むようにある、扇のようなあるいは丸みを帯びた楯のような高く張り出したとさか（前立て）」の形が特徴である。それはきらびやかな金糸銀糸の縫い取りや刺繍、真珠やビーズ、宝石などで飾られていた。ココーシニクは17世紀にはロシアで広まっており18世紀から19世紀にはロシアで最も広く用いられた冠物のひとつとなり、商人や町人たちに広まった。またピョートル一世以前の時代では、貴族たちが普段に身に着けていた。

ロシアの伝統的衣装において女性の冠物には格別な関心が払われてきた。民俗芸術への関心は19世紀初めに起こったが、19世紀後半～20世紀の初めになって民族衣装の一つの要素である女性の冠物にも多くの研究者が注目し、体系的な探求が行われることとなった。(Стасов В.В., Забелин

И.Е., Костомаров Н.И., Зеленин Д.К. など) 1917年の革命以降も類型学、構造分析、機能などの様々な面よりアプローチされ多くの研究が進められてきている。(Гаген-торн Н.И., Воронов В.С., Лебедева Н.И., Богатырёв П.Г., Рыбаков Б.А. など)

ロシアの伝統社会において女性の冠物は民族衣装の重要な要素であり一種独特な名刺としての役割を持っていた。つまり、冠物によりその所有者がどこの出身であるかを知ることができ、どの社会層に属しているかもわかった。さらに冠物の形や素材、装飾の変化は、年齢や婚姻状況、子どもの有無など、出産や結婚にまつわる生活の変化も反映していた。一般的に、生理的な習熟度と出産準備の指標としての頭の装飾が世界のほぼすべての伝統的文化において見られることは、これまで多くの民俗学者により指摘されてきたが、ロシアの農村の習慣も例外ではなかった。

古代ルーシにおいて既婚女性と未婚女性の冠物は異なっていた。その一番の違いは、未婚女性のものは頭頂部を覆う部分がなく髪が露わになっているのに対し、既婚女性のものは完全に髪を覆っていることであつた。ココーシニクは既婚女性が身に着けるものであつた。既婚女性にとって、髪を覆わないで人前に出ることは、自分を辱めることになつた。《опростоволоситься》という言葉（「頭髪をむき出しにする」「恥をかく」という意味）はまだロシア語から完全に消えてはいない。その一方で、ロシアの冠物の象徴や外観、そしてその名前を知る人は少なくなっている。ロシアの民族衣装の冠物の種類は膨大で、土地によって多様な名称を持っていた。しかしそのうちココーシニクは、現代のロシアでもその名前が広く知られ民族衣装のシンボルとして愛されている。

2018年のサッカーワールドカップロシア大会で、ココーシニクの形をした飾りを身に着けた三人の観客の姿がネットで拡散し、ココーシニクは一大ブームとなつた。ココーシニクの持つ独創的なフォルムとエキゾチックな装飾は外国の人々の心をつかみ、マトリョーシカをしのぐお土産品となつた。(Локалов [2018]) これはロシア人にとってもココーシニクを改めて「自分たちの物」と思うきっかけとなつた。しかしまた最近では、モ

スクワの男性デザイナーが昔ながらの制作技法で作った美しいココーシニクを復活させ話題になっている。《《Единственный в мире мастер по созданию кокошников открыл секреты мастерства》》彼の展覧会やギャラリーは注目され実際に作品が購入されているという。彼の展覧会は《Нормальный кокошник（正しいココーシニク）》と題されているが、彼によれば「お土産用のプラスチックのココーシニクは本物とは違う。『本当の』ココーシニクを皆に知ってもらいたい」という。2カ月以上の制作期間をかけ刺繍や宝石で美しく飾られたココーシニクを結婚式用に注文する女性もいるという。「本当のココーシニク」とはどのようなものであろうか。その魅力はどこにあり、そしてどんな女性たちが身に着けていたのであろうか。

本稿では「伝統的なココーシニク」の特徴を明らかにし、愛され続ける魅力の一端を探ることを目的とする。形や種類のほか、女性の一生の中でどのような役割をもったのか、またどのような歴史があったのかを概観する。次にココーシニクの魅力のひとつである「装飾」に注目する。その中でも「刺繍」を取り上げ、様々な模様の中からココーシニクに多く用いられたとされる「鳥」のモチーフについて考察する。次にココーシニクに特徴的である「真珠」の刺繍を検討する。刺繍は昔「手紙」と呼ばれていた。（村松[2006]:5）刺繍をすることは「手紙を書く」ことであった。女性たちの華やかな頭飾りは何を伝えているのであろうか。

## 2. ココーシニクの構成

### 2-1. ココーシニクの要素

ココーシニクは、固い土台の上に取り付けた楕のような高い張り出しを持つ女性の冠物である。髪をまとめるための小さな帽子が縫い付けられている。地域により違いはあるものの、主に以下の部分から構成されている。

**Очелье** 額の上にくる前立て。固い土台に取り付けられた軽い飾り板としての張り出し部分である。絹やキャラコ、ピロードなどで覆われている。

**Волосник** ココーシニクの下にかぶるもの。髪をおさめ頭をぴったりと包む。

**Поднизь** 真珠やビーズを糸に通したネット状の飾りで額から眉までを飾る。

**Рясны** 真珠を糸に通した房飾り。こめかみから肩まで下がり、ココーシニクの左右に取り付けられた。

**Позатыльник** 後頭部を覆うバックピース。カンバス地にビロードなどの布を巻き付けて作られ、土台に固定されていた。

ココーシニクと名の付く冠物は共通の特徴を持ちつつも非常に多くのバリエーションがあった。民俗学者は構成によりそれらを4つのタイプに分けている。地域的な特徴を持つこれらのタイプをシャンギナのカテゴリを元にまとめてみよう。

## 2-2. ココーシニクの種類

### (1) 「一本角のココーシニク」 **Однорогий кокошник**

このタイプには三つのバリエーションがある。

- ① 硬い前立てが、高い二等辺三角形または半月形をしているもの。

【図1】は半円形のタイプである。両脇の先端はとがっているかやや丸みを帯びていて肩先に向かって下がっていた。前立ては金刺繍や真珠、ビーズ、色とりどりの金縁の石や宝石、鮮やかな箔で飾られていた。金刺繍は後頭部にも施されていた。大きさは巨大で60 cmに達することもあったという。

- ② 正面が長く伸び、円錐形に縫製されているもの。【図2】のように正面の前立て部分に小さな真珠をぎっしり並べて作った白い「まつかさ」の飾りがたくさんあしらわれているのが非常に豪華で印象深い。金刺繍も多く施された。

- ③ 高い前立てと平らな丸いトップを持つ小さな帽子で金刺繍の飾りを持つもの。

一本角のココーシニクの特徴として、前立てに付けられた網目状の真珠の

飾りが挙げられる。これはすだれのように額を眉近くまで飾っている。またほとんどの場合絹のショールやモスリンの布と一緒に着用していた。上からかぶり、あごの下で留めるかココーシニクのてっぺんから胸、肩、背中に垂らしていた。分布の地域としてはヨーロッパロシア中央部のウラジーミル、コストロマ、ニジェゴロド、モスクワ、ヤロスラヴリとそれに隣接する地域（ヴォログダ、カザン、シムビール、ペルミ、ヴァトカ）があった。また移民によりシベリアにも伝わった。

## (2) 「底が平らな円筒形の縁なし帽」 **Кокошник в виде**

### **цилиндрической шапки с плоском дном**

【図3】のタイプはまっすぐ上に伸びる円筒形をしており耳を覆う小さな羽根部分を持つ。後頭部の硬い土台には長い帯状の布が縫い付けられていた。真珠やビーズをちりばめたすだれ飾りは額の上に眉付近まで垂れ下がっていた。金刺繍や、ビーズ、真珠で装飾された。図のようにショールを上からかぶりあごの下で留めるか、あごの下で交差させ首の後ろで結んだ。ヨーロッパロシアの北西部のオロネツ、トヴェーリ、ノヴゴロドなどでよく見られた。

## (3) 「頭頂部が平らな楕円形で、額の上が突出しており、耳覆いを持ち、後頭部に硬い長方形の垂れがついているもの」 **Кокошник с плоским овальным верхом, выступом над лбом, лопастями над ушами и пришитым сзади твёрдым прямоугольным позатыльником**

カルゴポリ、オロネツ、ノヴゴロドの北東部で特徴的な形であるが、装飾は地域によって様々であった。【図4】はカルゴポリのもので金属の糸で編んだブレードで縁取られており、前立てや耳覆いや後頭部の垂れの部分には金刺繍や真珠、ビーズにより飾り付けられていた。特に前立て部分は特に小さな真珠あるいはビーズによるネットが何層にも重なっていた。

## (4) 「二本のとさか、あるいはサドル型をしたココーシニク」

### **Двухгребенчатый или седлообразный кокошник**

高い丸みを帯びた枠を持ち、トップはサドル型で少し前部が持ち上がり後ろは高いとさか状になっていた。通常は、額布（飾りのついた細い帯状の

布)を頭に結び、後頭部を覆う **позатыльник** (バックピース) と、帯状に折りたたんだショールをかぶっていた。ショールの端は背中に下ろすか、後頭部で交差させて両脇で結んでいた。クルスク州、オレル州の西部郡、ハリコフ村で広まっていた。

上に挙げたココーシニクの主要タイプはいずれも構成や装飾、着用方法において多くのバリエーションを持っていた。そしてそれぞれが地元での名称を持っていた：キーカ **кика**、シェロモク **шеломок**、ズラトグラフ **златоглав**、ゾロトロムカ **золотоломка** など。(Соснина, Шангина [1998] : 117-120)



出典：Соснина Н., Шангина И. [1998] 119-120

### 3. ココーシニクの歴史

それでは次に、ココーシニクの歴史について見ていこう。まずココーシニクの背景から考える。ココーシニクと呼ばれる冠物にはいくつかの型があり、それらは地域より異なっていた。形以外のココーシニクの共通の特徴を見ると、先に述べた「髪をしっかりと覆い隠していること」というのがあるが、これはココーシニクだけでなく、「既婚女性」の冠物にとっての最大の特徴であった。このことは女性の髪型と密接に結びついていた。「冠物はあたかも髪型を補完しているかのようなものであった。」とゼレーニン述べている。(Зеленин [1926]) ロシア女性の髪型について確認しよう。

#### 3-1. 既婚女性と未婚女性の髪型と冠物

スラブの未婚の娘たちは髪を一本の三つ編みに編んで背中に垂らしていた。さらに昔の時代には、結婚式のときは全く髪を編まずに背中におろしていたといわれている。娘たちの冠物は、頭頂部を覆う部分がなく、また後頭部も覆わない花環のような形、または半円のような形をしていた。それに対して、既婚女性たちは髪を二本の三つ編みに編み、それを頭に巻き付け、冠物で入念に髪を人目から覆い隠していた。既婚女性が髪を覆う習慣は太古の昔より東西ヨーロッパ全てのスラブ民族でよく知られており、キリスト教以前の宗教観と結びついている。ロシアの村では髪を覆っていない既婚女性は、凶作や、家畜の疫病死、人々の病気など家に不幸をもたらすと考えられていた。

《Коса-девичья краса》 三つ編みは乙女の美—これは、良く手入れされた健康な長い髪は娘の美であり誇りである、という意味のロシアの成句である。三つ編みは乙女である「私」の美しさと純潔、自由な意思、そして結婚できる年齢であることを象徴していた。そして、単に一人ひとりの娘の美しさや誇りを示すだけではなく、特別な「サイン」の役割も持っていた。この三つ編みを見れば、正しく言えば三つ編みのリボンにより、その娘

がフリーかどうか、つまり結婚相手が決まっているかどうかを見分けることができた。もし三つ編みにリボンがなければ、娘はフリーである。もしリボンが一本あれば、彼女には結婚を考えている人がいて正式な申し込みのための仲人を待っているところである。またもし二本のリボンが結ばれていれば、婚約者がいるだけでなく、前もって両親の同意を得るための仲人が差し向けられすでに結婚の申し込みがされたことを示していた。(Анисимова: [2020])

三つ編みは娘時代の両親の家での自由な生活をも表していた。東スラブの結婚儀礼のサイクルの中で髪に関する儀式は重要な役割を持っていた。娘は結婚の際に、髪型も冠物も既婚女性のものに変えた。花嫁に新しく女性の冠物をかぶせる儀式は非常に重要な一大イベントであった。それは二段階に分かれており、第一の段階は結婚式の前日（または数日前）に行われる髪をほどこ儀式であった。花嫁の女友達が家に集まり、哀しい歌を歌い、泣きながら花嫁の三つ編みをほどき、娘用の冠物はずした。女友達が歌う歌は、娘が「自由な“私”と乙女としての美しさ」と別れを告げることを歌ったものであった。第二段階は結婚式の日であった。今度は花嫁の髪を二本の三つ編みに編み直し、頭に巻き付けて、新たな既婚女性用の冠物の下におさめた。この儀式は《повивание молодой》《окручивание молодой》（若い娘の巻きの儀式）と名付けられており、結婚適齢期の「娘」のグループから、「既婚女性」のカテゴリーへと移行することの最終的な承認を意味していた。ここから《окрутить девку》（娘を巻き付ける）、つまり「その娘を自分と結婚させる」という表現が生まれている。妻になり髪を隠した女性は、その後夫以外の男性に決して髪を見せることはできなかった。そしてこの冠物はいつでもどこでも、たとえ自分の家でさえも身に着けていなければならなかった。髪を見せて歩くことは既婚女性にとって最大の恥であった。もし喧嘩の拍子にでも男性が女性の頭から冠物を外してしまうようなことがあれば、女性は「名誉を汚された」として裁判に訴えた。既婚女性が髪を隠さずに歩きまわればドモヴォイが髪をつかんで屋根裏へ引っ張っていくとも言われた。



さらに、もし未婚の娘が道徳的規律に反し未婚の母となってしまった場合には、髪を覆い隠さなければならない厳しい掟もあった。つまり、もう娘としての装いをする資格はないとみなされた。髪型の区別は集団社会における社会的制裁としても機能していた。

しかし、なぜ結婚した女性は髪を隠さなければならなかったのであろうか。髪を隠すことにはどんな意味があったのであろうか。

ガーゲン＝トルンはこの問題に関し二つの考え方を示している。一つ目は、髪型の変更、そして既婚女性の冠物は、娘が結婚後にとる新しい立場をはっきりと象徴しているとするものだ。つまり、婚家での娘の自由のない隷属された状況を表しているとした。家父長制の古い社会での結婚は、新しい家、夫の家族への完全な従属を意味しており、髪を覆う結婚の儀式は自分の自由な意思をなくし、「全て夫の意向に従う」ということを象徴していた。娘の冠物を既婚女性のものに変えることは娘の自由が冠の下に消えることを意味していた。そのことへの嘆きが女友達の歌と涙で表現された。「自分の自由な意思と娘時代の美しさとお別れし、夫を持つ妻になった」ことは様々な歌で歌われた。例を挙げよう。

きのう小さいウサギは、きのう灰色さんは  
山のふもとを駆け回っていた  
きょう小さいウサギは きょう灰色さんは  
小さなお皿の上にいる  
きのう私たちのターニュシカは  
乙女だった  
きょう私たちのターニュシカは  
若奥様に (Соснина, Шангина [1998] : 308)

二つ目は、その理由を髪に宿る魔術的な力にあると考えるものだ。娘は結婚によりよその一族の家に入ることで、自分の髪に宿る魔術的な力によりその家に害を及ぼす可能性があった。そのため、夫の家を守るために髪を覆い

その力を封じ込めなければならなかった。乱れ、もつれた髪を持つ女性はスラブ人にとって悪い精霊であるルサールカがイメージされた。髪がぼさぼさの娘は「ルサールカみたいに歩いている」と言われた。また髪は、繁殖、種の継続とその幸福に結びつく魅惑的な魔法の力を持っており、性的な力をも体現するとされた。女性が髪を見せて人前に出ることは、自分の性的な魅力を解き放つことであり、夫の家に対する反乱であり結婚の結びつきへの反抗であるとされ、大きな罪とされた。永遠にその髪を冠物の下に入れて他人の目から隠すという行為は、娘が持つ、男性への性的魅力を夫以外の人の「不道德な」目から封印することを意味していた。(Гаген-Торн [1960] : 140-150)

このような、結婚の際にスラブの女性に求められていたものは、日本の昔の「家」を基礎とする家父長制時代に、女性に従順さと貞節を求め、それを美德としたことに通じるものがあるであろう。しかしそれが女性の「髪」と「冠物」に象徴されているところにはスラブの信仰の影響がみられる。

### 3-2. 伝統的な農民の衣装としてのココーシニク

次に農民たちの伝統的衣装であったココーシニクの特徴をゼレーニン、パルモン、シャンギナらの研究よりまとめてみよう。

#### 3-2-1. 歴史

20世紀前半の著名な民俗学者ゼレーニンは、既婚女性の冠物の起源について記している。これによると、スラブ以前の冠物のタイプは「ナミョートカ **намётка**」という手ぬぐい状のものにさかのぼる。刺繍を施された2メートルにもなる白く長い布を15センチ程度の幅に折り、頭にターバンのように巻き付けていた。これには結び目で二本の角(つの)のような形が作られており、これは古代スラブではお守りの役割を果たしていた。ゼレーニンによれば、その後冠物のかたちが次第に変化し、キーチカ、ソローカ、ココーシニクというロシア共通の冠物が生まれていった。(Зеленин [1926]) キーチカには非常にたくさんの種類があったが、ソローカあるいはココー

シニクと合体しつつ、ロシア農民の特徴的な冠物となっていた。パルモンは、「キーチカの上に柔らかいココーシニクをあわせたものは、独立したココーシニクに先行する非常に古い形である。」と述べている。(Пармон [1994] : 133) つまりココーシニクの多くはキーチカ型が元となっており、現存する当時のココーシニクの多くにその特徴が見てとれるということである。

またゼレーニンは、ロシア民族の広大な土地に広まった多様な女性の伝統衣装をロシア南部とロシア北部のものに大別した。その大きな違いは、南部がスカート状の「ポニョーヴァ понёва」を身に着けること、北部がジャンパースカート状の「サラファン сарафан」を身に着けることにある。

ロシア南部のポニョーヴァを中心とした「ポニョーヴァアンサンブル」の構成は、ルバーハ рубаха (シャツ)、ポニョーヴァ понёва (スカート)、ポーヤス пояс (帯)、ベレドニク передник (前掛け)、ナグルドニク нагрудник (胸当て) そして冠物のキーチカまたはソローカ、そして靴であった。このアンサンブルはヨーロッパロシアの南部の県 (ヴォロネジ県、カルーガ県、クルスク県、リャザン県、タンボフ県、トゥーラ県、オルロフ県、スモレンスク県の一部) で見られ、東方スラブで最も古くに形成されたと考えられている。これらの主要部分であるルバーハ рубаха (シャツ)、ポニョーヴァ понёва (スカート)、キーチカ (冠物) は、古代ロシア民族の形成期、つまり 11 世紀～12 世紀には既に女性の衣装を構成していたと考えられている。

一方、ロシア北部のサラファンを中心とした「サラファンアンサンブル」の構成は、ルバーハ рубаха (シャツ)、サラファン сарафан、ドウシェグレヤ душегрея (ベスト)、ココーシニク、靴であった。サラファンアンサンブルは、ヨーロッパロシアの北部であるポボルジ県、ウラル地方、シベリア、アルタイに存在した。サラファンアンサンブルは 15 世紀から 17 世紀のロシア国家の中央集権化の時期に形成されたと考えられている。サラファンアンサンブルの地域にはモスクワも含まれており、この時期に貴族、城下の商工業者、農民に広まっていった。ココーシニクは、この北部に始まった

サラファンアンサンブルのひとつの要素となっており、その広まりと共にロシア全土に広まっていったと考えられている。またこのサラファンアンサンブルはピョートル1世の時代までロシアの大貴族たちの普段服であった。(Пармон [1994] : 36)

19世紀後半になると、それまでココーシニクの上からショールの様にかぶっていたプラトークが、独立した冠物として、ポヴォイニクという柔らかい帽子の上に着用されるようになった。工場製の色鮮やかな模様入りの布地が普及し始めるとプラトークは広く普及することになった。ココーシニクは次第に日常生活から遠ざかり、19世紀の末にはロシアの多くの土地でココーシニクは消えていく。1920年代にはいくつかの村で結婚披露宴での装いとして確認される程度となった。(Соснина, Шангина [1998] : 121) そしていつしか、高い前立てとベール状の布を伴う伝統的冠物は、たとえ所有者が若い未婚の女性であっても「ココーシニク」と呼ばれるようになっていった、とキルサノワは述べている。さらに、20世紀に入ってからのココーシニクは、原則として若い女性の美しさをイメージするようになり、既婚女性の装いとは関連づけられなくなった。日常生活の中からは完全に消えてしまい、舞台衣装の中でのみ新たな命を得ていると指摘している。(Кирсанова [1995] : 135)

つまり、民族衣装としてのココーシニクが持っていた古い農村の習慣や生活様式全体と密接に関係していた厳格な識別性、社会における重み、そして象徴性は、現代に近づくにつれ重要性を失っていったといえる。

### 3-2-2. 目的

本来、ココーシニクは祝祭用の冠物であった。場所によっては結婚式の時だけに用いられる場合もあった。ココーシニクは通常、プロの熟練した仕立屋(ココーシニツツイ **кокошницы**)が工場製の様々な生地を用いて作っていた。村の店や都市の大きな店で売られ、または注文を受けて作られていた。日常生活でココーシニクを身に着けることはなく、大きな祝日や特別な日まで大切にとっておかれた。ロシアの祝日用の豪華な衣装は女性の姿を

堂々と立派に見せ、ココーシニクはそれにふさわしい華やかな冠であった。一方、日常の冠物にはソローカやポヴォイニクがあった。これらは農民たちが自分で縫うことができた。装飾されたココーシニクは豪華で高価なものであり、農民たちはココーシニクを大切に保存し、財産として受け継いでいった。何世代にも渡って使われることも多かった。こうした美しいココーシニクは「日常の冠物ではないにもかかわらず、ロシア共通の冠物とみなされていた。」(Пармон [1994]: 136)

またキーチカが純粋に農民の冠物であったのに対して、ココーシニクは農民以外にも町人、商人にも広がり、さらに貴族たちの普段着として用いられた。

### 3-2-3. 装飾

専門の仕立屋により作られたココーシニクは他の頭飾りとは大きく異なっていた。金襴やビロード、絹などで覆われた高い前立て部分と共に側頭部や後頭部もふんだんに飾られた。その装飾に好んで用いられたのは金刺繍やビーズ、箔、真珠、金モールや色付きガラスなどさまざまなものであった。特に「真珠」の装飾はココーシニクに特徴的であった。北部と北西部で見られたココーシニクには真珠を糸に通してネット状にした額飾りがあり、また真珠による刺繍でも飾られていた。こうした豪華な頭飾りは宝石よりも価値があり非常に高価であった。トロベツ郡の腕の良い職人により作られたビロードを用いたココーシニクは「トロベツキー・ココーシニク」と呼ばれ、最も高価なものとされた。

一方南部のキーチカ・ソローカの装飾にはビーズが多く用いられた。また彩色した鳥の羽根もよく使われた。北へ行くほど、つまりココーシニクの普及した範囲に近づくほどビーズと羽根の装飾は少なくなった。飾りの違いでも地域の違いが判別できた。

ココーシニクは結婚後にはじめて身に着ける「既婚女性」としての冠物の一つであった。特に美しく飾られたいくつかのタイプのココーシニクは、結婚した最初の年、あるいは最初の子供が生まれるまでの時期だけに身に着け

られ、お祝いや儀式の際に用いられた。この若い新妻の衣服における装飾の豊かさは、審美的なものに加え、自身の勤勉さや家の裕福さを誇示する目的があった。安っぽいものを身に着けるのは家族の恥であった。そのため、高価なココーシニクを買う余裕のない家庭は一時的に近所の家から借りることもあった。しかしこれ以外にも理由があった。結婚式、そしてそれに続く結婚生活の最初の数年は妻としての人生できわめて責任ある時期であり、多くの風習や儀式が目白押しであったからである。(Маслова [1978] : 17) つまり、神に接する儀式にふさわしい美しい装いであることが必要であると共に、若い妻を悪い闇の力から守り、また良い子どもに恵まれるようにとの願いが装飾にはこめられていたのであろう。装飾には一定の象徴性があった。この装飾の象徴性については後で考察する。

### 3-3. 上流社会のココーシニク

農民とは全く違う社会に暮らしていた王侯貴族たちの間ではココーシニクはどのように身に着けられていたのであろうか。

ピョートル1世の時代まで、サラファンアンサンプルは王侯貴族たちの日常着であったことは先に述べた。もちろんそれは農民とは品質や豪華さの点で異なっていたものの同じ伝統衣装の枠組みの中にあった。

ピョートル一世は国家や社会の改革を強力に進めてモスクワ・ロシア末期の絶対主義化と西欧化の方向性を決定的にしたが、この改革により、ロシアの伝統服の着用も制限され、服装の面でもロシアに新しいヨーロッパ様式がもたらされた。1700年12月1日の勅令で古いロシアの衣装の着用が禁止され、代わりにヨーロッパ式の服装が定められた。貴族の女性たちはブローチや羽根かざりのついたドレスを着用し、コルセットを装着した。ココーシニクなどの伝統的衣装はなくなった。当初この新しい流行服はツァーリとその側近の特権であったが、その後、首都の役人、貴族、富裕商人の義務となった。次第に田舎の貴族たちの日常にも入り込み、さらに町の職人たちにも広がった。しかし農民の女性たちはココーシニクも含め古い伝統の服を忠実に守り続けた。

エカテリーナ二世の世になると、フランスからの影響が益々強くなる一方で、ココーシニクは宮廷の衣装に浸透する。エカテリーナ二世は民衆への親しみやすさを強調するように、すすんでココーシニクを身に着けた。豪華なココーシニクを身に着けた「祖国の母」としての堂々とした肖像画が残されている。ロシア民族の伝統や歴史を尊重し、ロシアとの親和性を強調するためにロシア風の衣装を身にまとったのである。宮廷の女官たちにもココーシニクを着用して仮面舞踏会に出るよう奨励した。

1812年のナポレオン戦争の際には愛国心が高まり、伝統的な衣服への関心が大きくなった。ロシアの貴婦人たちは高価なブリュッセルのレース、天然の厳選された真珠や大きな宝石で装飾された豪華なココーシニクを身に着けた。民衆のシンボルであったココーシニクは貴族のアクセサリーへと変貌した。有名なロシアの回想録作者であるフィリップ・ヴィゲリは、そのころ多くの婦人たちが愛国的な気分になっていたことを思い出してこう記している。「彼女たちのほとんどが、サラファンを着てココーシニクやパヴァースキを身に着けていた；鏡を見ると、この晴れ着が自分にとてもよく似合っているために、すぐにその場を離れることができなかった。」(Вигель [1928] : 21)

1834年、ニコライ一世は公式に宮廷の女性たちの服をロシア式に統一する。そこにはココーシニクも含まれた。ロシア式のドレスとそれに合わせた冠物を規定したため、既婚女性にはココーシニク、未婚女性にはパヴァースキを着用するよう定めた。令嬢から女官までそれぞれの階級に統一した服装の色と装飾が定められた。長い袖と深いデコルテを持ち、ドレストレインには金刺繍が施されていた。その後も1917年の革命まで80年以上にわたり、ロシアではこの宮廷衣装のスタイルが維持され、ココーシニクも宮廷の衣装に組み込まれて残った。宮廷でのココーシニクは農民のものとはかけ離れたきらびやかで豪華なものになっており、ルネッサンス時代のイタリアの帽子かフレンチフードを思わせる装いであった。(Васильев [1998], Высокочков [2012])

アレクサンドル三世のもと、ロシアでは、古き良きロシアの流行の第二波

が押し寄せる。ロシアの民族衣装の歴史についての関心も高まった。擬似ロシア風の建築やインテリアも登場し、女性たちはルーシ風のドレスを着てココシニクを特注した。ボリショイ劇場やマリインスキー劇場ではロシアの歴史をテーマにした壮大な演劇が催され、華麗な衣装が舞台を飾った。伝統的衣装についての雑誌の発刊や、展覧会の開催もあった。雑誌「同時代人 **современник**」では民族衣装の歴史的意義についての問題、また人類の発展におけるその内的意味と意義の問題が検討された。この時期の歴史や伝統的な民芸品への関心は、進歩的な考え方を持つロシアの知識人の心を文字通り揺さぶり、ある種の社会現象となっていた。ロシアでの芸術支援の動きも見られた。民族衣装の収集家、ナタリヤ・シャベリスカヤはロシア全州の古い民族衣装、頭飾り、ウールやシルクのスカーフ、古代刺繍や織物、レース布などの装飾的手工芸品、紡績機、おもちゃなど壮大なコレクションを持っていた。ロシア国内をはじめアメリカやヨーロッパの各地で展覧会が行われ、1900年のパリ万博ではロシア館にも展示され世界の人々の目に触れた。<sup>1</sup>

1895年、ニコライ2世により、皇后アレクサンドラに宮廷の女性を紹介するレセプションが冬宮で開かれた。その宮廷の装いの豪華さは、雑誌『ワールド・イラストレーション』に詳しく紹介された。

20世紀の初めにはペテルブルクで衣装の国際博覧会が開かれた。そこではロシア中央部の歴史的な衣装から現代の衣装までが広く展示された。(Пармон [1994]: 255)

そしてロシアファッションの最大のピークは1903年の冬宮での仮装舞踏会であった。サンクトペテルブルクやモスクワの貴族や外交官などすべてのエリートがこの息を呑むような豪華なパーティーに参加した。これは20世紀における最も壮麗なイベントの一つとして歴史に記された。招待客が舞踏会に参加する条件はピョートル一世以前のスタイルを持つ衣装を身に着ける

---

1 彼女のパリでの病没後コレクションはロシア美術館に寄贈されたが、パリに残された一部はロシアに戻ることはなく現在もパリやアメリカに散らばっている。



ことであった。マリンスキー劇場の最高の衣装デザイナーや最も人気のある仕立て屋や宝石商の努力により貴族たちは金襴の上着、ベルベットのカフタン、美しいサラファンやオペラ風のココーシニクを身に着けて参列した。ココーシニクには宝石商たちが何キロもの金や宝石を使い、スタイリッシュな頭飾りを装飾したといわれる。彼女たちの姿を残した写真は、元の白黒写真に色を再現する技術を施して公開されている。ため息が出るようなきらびやかで美しい世界を垣間みることができる。《Грандиозный бал-маскарад в доме Романовых : раритетные снимки 1903 года-в цвете》

その後の1917年の10月革命の後、この舞踏会に参加した貴族たちの多くは亡命した。彼らは高い教養と美的センスを生かしファッションの世界で仕事を得ていくことになる。特に多くの亡命者を受け入れたパリではココーシニクも含めロシア特有の刺繍や民俗的モチーフが世界のファッションにも影響を与えていくことになるが、これについてはまた別の機会とする。

## 4. ココーシニクの装飾

### 4-1. 刺繍

ロシアの頭飾りの装飾のひとつに刺繍がある。ロシアにおける刺繍の歴史は古く、自然を崇拜した多神教時代にさかのぼる。太古の昔よりロシアでは、死や病、邪悪な霊から身を守るためのお守りとして刺繍が描かれた。また健康や幸せ、収穫を神に願い、祈るために刺繍した。刺繍は、単なる美しさのための装飾ではなく、「お守り」であり「祈り」として大切にされ、生活の中に深く根付いていた。ロシアの農村ではそれぞれの家庭で、みずから糸を紡ぎ、布を織り、衣類や寝具に刺繍をほどこした。刺繍は18世紀から20世紀はじめのロシアの伝統的衣装を飾ってきた。特に既婚女性の冠物や娘の冠物にはいつも刺繍が施されてきた。

1860年代までに広く知られていたすべてのパターンには象徴的な意味があり、それは「読み取る」ことができた。その象徴的な意味に合わせて、刺

繡は「男性」「女性」「乙女」「結婚式」などに分けられていた。当然のことながら、その柄を着ることができるのは、適切な性別と年齢層の人だけであった。例えば「母性」のパターンは、男性、老人、子供、未婚の女性には許されなかった。悪い霊は衣服の開いている箇所や端から入り込んでくるとされた。そのため刺繡を施して危険や害から守った。刺繡は衣服や生活用品の装飾に使われ、個人、家族、コミュニティの生存を「魔法のように保証してきた。」(《Традиционный русский костюм》)

頭も人間の身体の中での重要な場所であり、冠物で覆い刺繡を施してきた。頭を覆う冠物は古代の宗教観と最も結びついており、儀式において重要な役割を果たしていた。ココーシニクの装飾にも一定の象徴性があった。(Маслова [1978]: 17) 古代神話からとった図柄や動物界からとったモチーフは、お守りや魔除けとしてとくに大きな力を持つとされていた。まずは、ココーシニクに多く用いられた「鳥のモチーフ」を取り上げよう。

#### 4-1-1. 鳥のモチーフ

##### (1) 世界樹と女性の冠物

「世界樹」は、キリスト教導入以前からロシア人が持つ世界観、宇宙観を表していた。「世界樹」は世界の中心に立ち、天を支え、天界と地上の世界を結んでいる。木は上の世界、中間世界、下の世界という三つの部分から構成されていた。世界樹の一番上には宇宙を司る神様や先祖が住んでいる「上の世界」があり、天頂には太陽を表す鳥が描かれていた。木の幹の部分が人間の世界である「中間世界」、そして根を張る部分が「下の世界」で魔界を意味していた。こうした考え方は生活の様々な場面で見られ、女性の民族衣装も世界観を具現化したマイクロコスモスと考えられた。女性の衣装では冠物は上の世界の鳥を象徴していた。スカート部分は中間世界、つまり地上の世界を表し、畑や植物、花が描かれた。冠物そのものが「鳥」の名前を示していたことを思い起こそう。「ココーシニク」は雄鶏、雌鶏を語源としていたし、それ以外にも、「キーカ」、「キーチカ」、はガチョウ、「ソローカ」はカササギを意味していた。

鳥のモチーフは、最もよく用いられ、愛されたものの一つであった。鳥はフォークロアにおいても図柄においても多様な意味を持っていた。鳥は善と幸福のシンボルであり、暖かさと光を象徴し、豊穡と富を予兆した。春の祈りの歌では、明るく美しく、暖かい春を連れてくるよう鳥たちに呼び掛けた。農村での装飾には歌のイメージを反映し、素晴らしい未来を予言する鳥のモチーフもよく見られた。愛と結婚式の歌詞には明るい鳥の姿があった。親鳥とひなの姿はロシアのフォークロアではよく描かれるものであり、図柄においても母性の概念をはっきりと示していた。では、どのような例があるのかを見てみよう。

## (2) 白鳥のモチーフ

刺繍にはあらゆる種類の鳥が描かれ、水鳥、鶏、孔雀、鶯などを明確に判別することができた。中でも水鳥のモチーフは東ヨーロッパにおいて古い伝統があり、特に白鳥は北部ロシアの刺繍に広く用いられた。白鳥はココーシニクに金刺繍で描かれることが多く、前立てや後頭部を装飾していた。白鳥はふつう中心部の図柄（女性像または世界樹など）の両脇に配置された。白鳥はS字型で描かれることが多く、非常に簡潔な線でありながら表情豊かで、見れば必ずそれとわかった。白鳥の長い首のカーブと胸は常に描かれ、尾や高く掲げた翼も時々見られた。白鳥は北部地方で最も敬われた鳥であった。白鳥は自然界の水、空、太陽と本質的に結びついており、そのことは図柄に表れていた。白鳥の下部には水を表すギザギザの波線が引かれ、構図全体が太陽を表すシンボルで満たされていた。対となった二羽の白鳥の刺繍は昔から幸せな結婚を意味しており、このイメージはすでに19世紀にはあった。民間伝承によると、白鳥は結婚相手の死に耐えられず、高く飛びあがったかと思うと急降下して地面に身を投げ、命を落としたといわれる。ロシアの結婚の歌では花嫁は白い白鳥にたとえられる。ココーシニクに描かれた向き合って胸を合わせた二羽の白鳥は結婚式での花嫁と花婿と考えられる。ココーシニクには幸福と愛を願うハートのモチーフもよく一緒に描かれていたが、これとも相まって二羽の白鳥の融合はゆるがない結婚への願いと読むことができるだろう。白鳥は結婚式のシンボルとして、結婚式用の手ぬぐいや

帯にも描かれている。(Маслова [1978] : 160-66,163-164)

### (3) 鶏のモチーフ

もう一つの「鳥」のモチーフは鶏である。鶏も金刺繍の技術で描かれた。鶏はスラブの時代から敬われてきた鳥であり、ロシアの民衆文化には馴染みの存在である。雄鶏は太陽、火、光の化身であり富と繁栄のシンボルである。刺繍において雄鶏と雌鶏のモチーフは結婚を表した。また雄鶏と雌鶏は豊穰—多産のおまじないでもある。そのため鶏は出産年齢の女性の衣装に描かれた。若い、結婚したばかりの妻のココーシニクにも描かれていた。マースロワは母鶏とひなを描いたモチーフは極めて注目すべきものだと指摘している。大きい鳥と小さい鳥を一緒に描く構図がしばしば見られるが、これは母鶏とひなとみるのが自然であろう。数羽のひな鳥が親鳥の身体の中やその周りにいる図柄には明らかに母性が表れている。(Маслова [1978] : 57-60) ここには豊穰—多産を願う気持ちと共に親が子を慈しむ心が現れていると読むことができる。

マースロワが「古代の装飾に反映されている動物のモチーフは、主に大地、動物、人間の豊饒を象徴し、家庭の安らぎ、家族の幸福に結びついている。」と述べているように、鳥のモチーフにも幸せな結婚と家族の幸福、そして豊穰への願いが表されているとみなすことができる。(Маслова [1978] : 166)

## 4-1-2. 金刺繍と真珠

上に挙げた鳥のモチーフも含め金刺繍を幻想的に美しく輝かせたのは真珠であった。緻密な素材に真珠をあしらった刺繍は金刺繍と組み合わせるのが一般的であった。

ロシアの金刺繍は、当初、絹糸と金・銀糸だけを用いた「アイコン刺繍」であったが、その後「装飾教会刺繍」に発展し、金、絹、ビーズ、金銀モール、真珠、宝石等を用いて、立体的に華やかに布を装飾する刺繍が主流になっていった。ココーシニクにはこの金刺繍に「川真珠」を用いる装飾が特徴的である。(村松 [2006] : 31-32)

天然素材である真珠は常に不思議な力を持つとされた。その白さと虹色の光沢は、純潔と美德の象徴であった。独創的なココーシニクが多く作られていた北の地方に、美しい真珠の装飾が伝わったのも不思議ではない。美しい頭飾りの作成にはこの貴重な素材が大量に必要であった。ロシア北部の厳しい自然の地に、夏の夜明けの空のように優しい繊細な光をもつ真珠が女性たちの髪飾りを彩った。真珠の美しさは人々にとって特別な意味を持っていた。真珠の採取に携わるのは善良な魂を持った人だけだと信じられており、真珠はロシア人の心の奥底にある美の追求を反映し、あらゆるものを飾るとされていた。ロシアに民衆詩において「真珠のような」という叙述は最も好まれた表現の一つであったが、こう形容されたのは「露」で、これは農民にとって大切な夏の晴天の前兆であった。また、乙女の涙にもたとえられた。(Мерцелова [1988] : 90-91)

さて、ロシアの真珠はどこから来たのであろうか。真珠の装飾は古代ルーシより愛されてきた。10世紀以前よりペルシャやインド、オランダ産の真珠が入っており金刺繍にも用いられてきたが、15世紀にはロシア北部のオロネツやアルハンゲリスクなどで川真珠が採取されるようになる。(村松 [2006] : 33)

17世紀にまでにこの金刺繍は地主や侯爵の家や修道院の工房で発展したが、最も普及したのは農民刺繍においてであった。このころの北ロシアでは、約200本の川に真珠があることが知られていた。生産量が多いために裕福でなくても真珠は手に入れることができた。民衆の金刺繍に真珠を用いたのが主に女性の冠物であった。真珠を刺繍したココーシニクは非常に美しかったが、同時に難しい技術を必要とした。真珠を糸に通してつなぐ技術は女性たちによって生み出され、世代を超えて受け継がれていった。つないだ真珠は網目状につないだり何層にも重ねたりしてココーシニクを飾った。(Носань [2009] : 179) 落ち着いた柔らかな色は豪華すぎる金や絹を優雅なものに変え、おごそかな光となって女性たちの肌を照らしただろう。頭飾りの装飾性は、常に衣装との釣り合い、リズム、割合に気を配って決定され、それにより全体がきわめて調和のとれたものとなっていたことにも注目

すべきである。真珠は衣服や帯にも刺繍され、全体が統一されたバランスのもとに、洗練された心地よい美しさが完成されていた。

とりわけ美しいとされたいくつかの頭飾りを挙げてみよう。

18-19世紀初期のトヴェーリ県のオスタシュコフ郡の「ゴロフカ（小さい頭）」の名前で知られる円筒形のココーシニクは耳を覆い、バックピースである帯状の布（поднизь）がしっかりとした土台の上に縫い付けられている。そのほぼ全面が金色のモールで覆われ、金糸による緻密な刺繍と縁取りが施されていた。その下には細かい真珠を用いたネットによるフリルが額から眉までを飾っていた。《Женский головной убор-кокошник. Тверская губ., XVIII-нач. XIX вв.》

18-19世紀のオロネツ県のカルゴリスキー郡のココーシニクは細長い楕円形で耳を覆う羽根がついているのが特徴である。表面はキラキラしたモールが施され額部分には真珠と白いビーズがびっしりと敷き詰められている。その下には長くはないが重層的な真珠のネットが降りている。《Праздничный головной убор женщин Русского Севера рубежа XVIII-XIX вв.》

18世紀以降、ウラジーミル、ニジニ・ノヴゴロド、ヤロスラヴリ、コストロマなどでは、縦または横に張り出した巨大な前立てが特徴的な、細長い三角形や半円の形をしたココーシニクが有名である。表側には真珠や色箔、ガラスのはめ込みなどの豪華な刺繍が施され、裏側には桜色のビロードに植物などが金刺繍で装飾された。顔に接する額部分は、ほぼ全体を幅広の真珠のネットが覆っていた。《Выставка 《Кокошник-символ русского костюма》 в Муромском музее》

生き物から取り出した真珠は、生きていると信じられており、あたかも女性の衣装における生命の象徴のようであった。最も古い花嫁衣装の一つである有名なプスコフの「円錐形のココーシニク」には豊穡の思想が表現されていた。円錐形の前立てには真珠をたくさん並べて作ったボール状の「松かさ」がたくさん飾られていた。「松かさの数は子どもの数」と昔から言い伝えられているように、花嫁は松かさの数のようにたくさんの子を生み、夫と末永く暮らせるようにと願った。「春の大地に花が咲き誇り、新郎新婦が共

に人生を歩み始めたとき、自然の賛美、豊穡の思想をこれほどまでに象徴的かつ芸術的に表現したプスコフの冠物はロシア女性への賛歌のようであった。」(Мерцелова [1988] : 97)

## 5. まとめと考察

以上のことより、ロシアの伝統的な女性の冠物であるココーシニクの特徴は以下のようにまとめることができる。

1. 既婚女性の冠物であり、当初はお祝い用としての用途であった。特に美しく装飾されたものは、結婚1年目、もしくは一人目の子どもが生まれるまでの若い新妻が身に着け、それ以降は祝日か特別な日に身に着けた。
2. 形の特徴は、名前の語源が「鶏」であるように、とさかのようによく張り出した前立てにあった。この前立ては上質な布に覆われた硬い土台に取り付けられ、真珠などの宝石や金モール、刺繍やガラスなどで豊かに飾られた。農民たちの間では17世紀にロシア北部を中心に広まり、19世紀には全土に普及した。20世紀には日常から姿を消していった。
3. ココーシニクは王侯貴族の間でも愛され、ニコライ一世以降は正式な宮廷服の一部となり革命まで続いた。豪華さを極め、農民のものとはかけ離れていった。しかし形や色の組み合わせ、カットやモチーフには共通性があり、素材や装飾品だけが、所有者の階層、財産状況を物語っていた。
4. ココーシニクは天上世界を象徴し、人間と天や神とのつながりを表していた。装飾には古代からの自然崇拝の神聖な祈りと法則が豊かに表現されていた。ココーシニクには若い女性の願いを反映するような特定のパターンのモチーフが守られてきた。金刺繍のモチーフである鳥の図柄には幸せな結婚による夫婦の幸せと豊穡・多産を願う気持ち、誠実な結婚や、家族の幸福と健康への祈りが織り込まれていた。また

優しく柔らかい光を放つ真珠は豪華すぎる金や絹を落ち着いた優雅なものに変え、おごそかに女性の顔を照らした。真珠で作った松かさ飾りは花嫁の豊穡のシンボルであった。

さて、ロシアの多くの伝統的な女性の冠物の中で、「ココーシニク」が今も民族衣装のシンボルとされ、ロシアの人々に愛される魅力を考えてみよう。その大きな要素はまずその「美しさ」ではないだろうか。美しく装うことはいつの世も女性に自信と誇りを与える。農民女性の生活は家族や畑、牛の世話をし、必死に働くことで忙しく自分の時間はなかった。しかし彼女たちは美しくあることを願った。「お祝いの装いをした女性は自分を美しいと感じそれを喜ばしく思った。そこにはお祝いの気分と創作の満足感が絡み合い、農民女性にとっての数少ない喜びとなっていた。」(Мерцелова [1988] : 11) 祝祭用の華やかな衣装を身に着けると、女性たちは嬉しく楽しい気持ちになれる貴重な時間を持つことができた。冠物についてみると、女性は髪を覆う必要性があったために自分の髪を結い上げることや飾りを付けて美しく装うことはできなかった。しかし、その代わりに冠物は髪を飾るのと同じように、いや、それ以上に女性たち自身が思うままに飾ることを望み実践したのではないだろうか。ババーエフは「古代ルーシにおいてもっとも洗練されていたものは既婚女性の冠物である。頭飾りの製造と装飾の技術は非常に高く、このことは頭飾りの豪華さは自然な髪型の美しさに勝るものでなければならなかったということを物語っているかのようだ」と述べている。(Бабаев [2011]) この華やかに「飾る」ことに貢献したのはココーシニクの持つ形状にあったと考えられる。特に縦または横に広く伸びた前立ては大きなフラットなキャンバスとなり、自由に演出を施すことができたはずである。正面を高くし、見せる面が大きくなることで装飾や細工の効果的な配置も可能になったであろう。農民女性たちは様々なステッチで金刺繍を施し、色のついたガラスビーズを組み合わせながら無数の真珠を編んで顔の周りにあしらった。貴族社会では金や真珠や大きな宝石、金刺繍や豪華な細工で飾った。ココーシニクの巨大な形は一見奇異に思われるかもしれないが、



18世紀には、フランスで流行った戦艦をあしらった巨大な髪型もロシアの貴族社会に取り入れられている例もあり決して特殊ではない。髪型はいつの時代も女性の美のキーポイントであった。ココーシニクも一種のスタイリッシュな「髪型」であったとも考えられる。また華やかに装飾された女性の冠物は天と人々を結ぶ神聖な儀式にふさわしいものであった。「ロシアの民族衣装の芸術様式の中で、ココーシニクは重要な役割を果たしていた。豪華に装飾されたココーシニクは女性の堂々とした祝祭用衣装の冠物となって顔を際立たせ、着用時の状況の厳粛さを強調していた」(Кирсанова [1995] : 135)。

二つ目の要素は、ココーシニクに込められた共通の「祈り」であろう。ロシア農民芸術の研究者として知られたヴォロノフは、ロシアの農民芸術のほとんどすべての装飾的内容は民間生活における古代の宗教的原則の象徴として説明されることを明らかにした(Воронов [1972])が、古来より民族が持つ自然崇拝の異教信仰の中で生み出された祈りや願いはモチーフとなって女性たちの手で刺繍の中に込められ、映し出されていた。頭にまつわる装飾は上の世界を示しており、高い頭飾りは人間と天や神とのつながりを象徴的に表していた。装飾、つまりモチーフの形自体が意味を表し、その特別な力を決定していた。動物や植物のイメージを持つ装飾品は豊穡の力と結びついていた。このように、人々の生活に密接に関連して生まれる女性たちの願い、夫婦の幸せと豊穡・多産を願う気持ち、家族の幸福と健康への祈りが繊細で華やかなきらめきとなってココーシニクに織り込まれていた。

以上のように、ココーシニクの持つ魅力の一端を明らかにすることができた。ココーシニクは遠い祖先たちが持つ美の記憶を伝え、人々の精神性や世界観までも反映している。決して廃れない魅力を持ち、昔と今、そして未来をつなぐ鎖となっているに違いない。

## 参考文献

- Анисимова Е., 12 марта 2020 г., «Носили ли в старину русские девушки чёлки». <https://blog.mediashm.ru/?p=5371>(2021 年 7 月 13 日閲覧)
- Бабаев К. [2011] «О типологии происхождения русских головных уборов», *Журнальный клуб Интелрос «Теория моды»* №21 <http://www.intelros.ru/readroom/teoriya-mody/m21-2011/16440-o-tipologii-proishozhdeniya-russkih-golobnyh-uborov.html> (2021 年 7 月 11 日閲覧)
- Бакланова Т. И., Стрельцова Е. Ю. (под ред.) [2002] *Народная художественная культура. Учебник*, М., МГУКИ, С. 362-400.
- Васильев А.А. [1998] *Красота в изгнании : творчество русских эмигрантов первой первой волны : искусство и мода.*, М., Слово
- Вигель Ф.Ф. [1928] *Записки. Т. 2.*, М., Круг, [https://imwerden.de/pdf/vigel\\_zapiski\\_tom2\\_1928\\_\\_ocr.pdf](https://imwerden.de/pdf/vigel_zapiski_tom2_1928__ocr.pdf), (2021 年 7 月 11 日閲覧)
- Воронов В.С. [1972] «крестьянское искусство», *О крестьянском искусстве. Избранные труды.* М., Советский художник., <https://www.booksite.ru/fulltext/voro/nov/1.htm#1> (2021 年 7 月 11 日閲覧)
- Выскочков Л. В. [2012] *Будни и праздники императорского двора.* СПб., Питер, <https://dspace.spbu.ru/bitstream/11701/2322/1/03956895.a4.pdf> (2021 年 7 月 13 日閲覧)
- Гаген-Торн Н.И. [1960] *Женская одежда народов Поволжья (материалы к этногенезу).* Чебоксары, Чувашское государственное издательство, <https://www.kunstkamera.ru/files/lib/gagen-torn1960/gagen-torn1960.pdf> (2021 年 7 月 11 日閲覧)
- Зеленин Д.К. [1926-1927] «Женские головные уборы восточных (русских) славян», *Slavia, Rocnik V, Sesit 2*, с. 303—338; *Sesit 3*, С. 535—556. Прага, [https://www.gumer.info/bibliotek\\_Buks/Culture/zelen/1.php](https://www.gumer.info/bibliotek_Buks/Culture/zelen/1.php)
- Каминская Н. М. [1977] *История костюма*, М., Легкая индустрия
- Кирсанова Р. М. [1995] *Костюм в русской художественной культуре 18-первой половины 20 вв. : опыт энциклопедии*, М., Большая Российская Энциклопедия
- Короткова М. В. [1998] *Путешествие в историю русского быта*, М., Русское слово
- Костомаров Н. И. [1993] *Домашняя жизнь и нравы великорусского народа.*, М., Экономика
- Локалов А. [2018], «Наряд вне очереди», <https://rg.ru/2018/07/14/pochemu-kokoshnik-vdrug-stal-tak-populiaren-vo-vremia-chempionat-mira.html> (2021 年 7 月 13 日閲覧)

- Маслова Г. С. [1978] *Орнамент русской народной вышивки : как историко-этнографический источник*, М., Наука
- Маслова Г. С. [1984] *Народная одежда в восточнославянских традиционных обычаях и обрядах XIX-начала XX в.*, М., Наука
- Мерцалова М. Н. [1988] *Поэзия народного костюма.*, М., Молодая гвардия
- Носань Т. М. [2009] «Карельский жемчуг», *Известия Российского государственного педагогического университета им. А. И. Герцена*, С. 178-181, <https://cyberleninka.ru/article/n/karelskiy-zhemchug> (2021 年 7 月 11 日閲覧)
- Пармон Ф. М. [1994] *Русский народный костюм : как художественно-конструкторский источник творчества.*, М., Легпромбытиздат
- Рыбаков Б. А. [1981] *Язычество древних славян*, М., Наука
- Рыбаков Б. А. [1987] *Язычество древней руси*, М., Наука
- Скворцова И. В. [2008] «Головной убор в ансамбле русского праздничного крестьянского костюма», *Известия Российского государственного педагогического университета им. А. И. Герцена*, С. 313-316
- Соснина Н., Шангина И. [1998], *Русский традиционный костюм : Иллюстрированная энциклопедия.*, СПб., Искусство-СПБ
- Сыромятникова И. С. [1983] *История причёски*, М., Искусство
- Фасмер М. [1967] *Этимологический словарь русского языка*. Т. 2. М., Прогресс
- «Выставка «Кокошник - символ русского костюма» в Муромском музее» <http://www.museum.ru/N76723> (2021 年 7 月 11 日閲覧)
- «Грандиозный бал-маскарад в доме Романовых: раритетные снимки 1903 года - в цвете» <https://kulturologia.ru/blogs/221116/32340/> (2021 年 7 月 13 日閲覧)
- «Единственный в мире мастер по созданию кокошников открыл секреты мастерства» 21 марта 2019, <https://vostokmedia.com/news/world/21-03-2019/edinstvennyu-v-mire-master-po-sozdaniyu-kokoshnikov-otkryl-sekrety-masterstva> (2021 年 7 月 11 日閲覧)
- «Женский головной убор – кокошник. Тверская губ., XVIII – нач. XIX вв.», <https://izi.travel/ru/0df7-zhenskiy-golovnoy-ubor-kokoshnik-tverskaya-gub-xviii-nach-xix-vv/ru> (2021 年 7 月 11 日閲覧)
- «Праздничный головной убор женщин Русского Севера рубежа XVIII- XIX вв.», <http://nmrk.karelia.ru/site/exhibit/3> (2021 年 7 月 11 日閲覧)
- «Традиционный русский костюм» <http://traditionalrussiancostume.com/embroidinfo/xru.php?nametxt=3> (2021 年 7 月 11 日閲覧)
- 丹野都 (監修) [2006] 『世界の民族衣装の辞典』 東京堂出版
- 沼野光義・望月哲男・池田喜朗 (編) [2019] 『ロシア文化事典』

- ・沼野光義・沼野恭子・平松潤奈・乗松享平（編）[2021]『ロシア文化 55 のキーワード』  
世界文化シリーズ 1 ミネルヴァ書房
- ・パトリシア・リーフ・アナワルト 蔵持不三也（監訳）[2017]『世界の民族衣装文化図鑑』  
（合本普及版）終風舎
- ・村松 香 [2006]『ロシア刺繍のファンタジー』ユーラシア・ブックレット No. 96 東洋書店
- ・山田篤美 [2013]『真珠の世界史—富と野望の五千年』中央公論新社